

地域研究に立脚した戦争と記憶をめぐる社会史・文化史

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2018-11-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 泰平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00025987

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：13801

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26570008

研究課題名(和文) 地域研究に立脚した戦争と記憶をめぐる社会史・文化史

研究課題名(英文) Area Studies-Based Socio-Cultural History on War and Memories

研究代表者

岡田 泰平 (Okada, Taihei)

静岡大学・情報学部・准教授

研究者番号：70585190

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：フィリピン、韓国、日本における戦争と記憶をめぐる共同研究を行った。20世紀史は日本の戦争の50年とアジア諸戦争の30年から構成されているが、この二つの戦争を架橋することを意図するとともに、そのような記憶を構成し強調する「記憶の活動家」に注目した。想起という側面においては、誤解やその他の記憶の忘却を具体的に論じた。特定の碑や地域において、相反する記憶が並存している様相を明らかにした。20世紀の戦争の記憶として、フィリピンの事例を日本や韓国の事例と共に並置した。そうすることにより、東アジアという文脈から距離を置き、歴史問題を考えることを促した。

研究成果の概要(英文)：This is a joint research on war memories across borders among Japan, South Korea and the Philippines. The wars of the 20th century in East Asia consist of 50 years of Japan's invasion against Asian peoples and 30 years of domestic and international wars in countries outside of Japan. As joint researchers with different national backgrounds, we paid particular attention to the role of "activists on memories." 1) On "remembrances," we cited examples of misunderstanding and forgetting of other memories. 2) We also clarified conflicting memories on the same memorial and in the same site. 3) We also included the Philippines to the discussion of "politics of memories," which is usually confined among Japan, South Korea and China.

研究分野：アジア史

キーワード：アジア太平洋戦争 朝鮮戦争 記憶 忘却 想起 観光 遺骨 博物館

1. 研究開始当初の背景

本研究は、一九九〇年代に歴史学に生じた二つの潮流から考案した。第一は言語論的転回である。端的には、文書資料の優位が切り崩され、歴史像は文書のみから専門的な歴史学研究者によって解明されるのではなく、常に人びとの集合的な意識との関係から構築される。この点から、歴史研究には人びとの記憶を示すモノの分析を欠くことが出来ない。

第二にはナショナリズムを越えた歴史叙述である。キャロル・グラックによれば、旧来の歴史は、国民国家を礼賛する「英雄物語」だった。この「英雄物語」に特定の記憶を伴い挑戦していったのが「記憶の活動家」と呼ばれる人々だった（「記憶の作用 世界の中の「慰安婦」」『歴史で考える』岩波書店、2007）。

この二つの観点から、本研究では国境を越えて記憶の問題を論じることを目指した。その際に、もう一つの補助線としたのは、和田春樹の二〇世紀における二つの戦争論だった。つまり、一九四五年を分水嶺としてそれまでの日本のアジア侵略戦争の五〇年とそれ以降のアジア諸戦争の三〇年である（和田春樹「日本の戦争和解…」『過ぎ去らぬ過去との取り組み』岩波書店、2011）。この二つの戦争を連続した位相として考えることを一応の目標とした。

2. 研究の目的

このような観点に立ち、本研究は以下の先行研究の限界を地道に多少なりとも押し広げることが目的とした。以下では先行研究の到達点と本研究から見る限界を示した。

(1) 第一のものは、いわゆる歴史問題を緩和すべく、日中・日韓の間で行われてきた共同研究である。様々なテーマで展開されてきたが、それにも拘らず、既存の国家をベースにした対話を目的としてしまうので、それぞれの研究者がナショナル・ヒストリーの枠組みから離れることが困難となってしまう。

(2) 第二のものは、日本のアジア侵略戦争末期に位置するアジア・太平洋戦争に焦点を当て、植民地主義をも含み日本の様々な加害を具体的に解明してきた研究である。一九九〇年代に活性化されたいわゆる戦後補償運動とともに展開してきたが、その分だけ現実政治に働きかけることが目的とされ、記憶という曖昧な事象よりも、事実を解明することに重点が置かれてきた。

(3) そして第三のものは、ピエール・ノラ編『記憶の場』およびこの手法に触発された、場やモノを介して記憶のあり方を描き出す研究である。ノラに対してはフランスの国民主義的なナショナル・ヒストリーに還元してしまっているとの批判があり、この点を乗り

越えようとしたものに『東アジアの記憶の場』がある。しかし、共通の記憶が強調される分、想起や忘却といった記憶にかかわる力学の解明については課題として残された。

本稿は、(1)のナショナル・ヒストリーは意識しつつも、より小さく、マイナーで、ローカルな歴史の断片を主な対象とし(2)の日本の加害の解明という課題を引継ぎつつも、アジア諸戦争も意識し、(3)のモノに則し記憶を具体的に論じることを目指した。

3. 研究の方法

共同研究の当初から、日本、韓国、フィリピンを具体的な対象地域とすることは決まっていたが、それぞれの研究者が特定のモノや場を対象とし個別の研究を進めた。ただし年に一度は共同の研究会を開き、可能であればフィールドワークを組み込んだ。

(1) 二〇一四年度は北海道・札幌で、明治期の北海道開拓と朝鮮半島侵略を遺骨でつなぐ研究を行っていた研究者を囲みワークショップを行った。

(2) 二〇一五年度はマニラで、本研究グループ以外の研究者との共同のワークショップを行った。外部の研究者は、天皇フィリピン訪問に至る日比の戦争記憶とハイレベルでの対話、フィリピンにおける州都・町での戦争碑、マニラ日系人社会の戦前と戦争直後、中国における戦争をめぐる対日認識について研究を共有してくださった。本グループのメンバーは、北海道における遺骨の発掘と国際交流、茨城の博物館が表象する戦争記憶、フィリピン児童文学と戦争、セブにおける戦争犯罪と憲兵隊の戦友会や戦記ものにおける犯罪の表象、韓国における朝鮮戦争の記憶についての発表を行った。

(3) 二〇一六年度は茨城において、ワークショップを行った。それぞれの研究の進捗状況の報告と共に、鉾山における朝鮮人・中国人の労働、遺骨の取り扱い、在日朝鮮人の記憶について在地の活動家から伺った。

このように行ってきた研究は、おおむね『歴史評論』二〇一七年八月号掲載の特集「越境する戦争の記憶」所収の論文という形でまとめた。

4. 研究成果

上述の「研究の目的」(3)においては、次のような特徴と限界があり、本科研プロジェクトはその限界を押し広げてきた。

(1) フランスであれ、東アジアであれ、その地域に共通の記憶の解明が前提となってしまうとあり、誤解や記憶の齟齬という側面

は十分に捉えることができなかつた。これに対して本研究では、同じ碑を見るにしても、見る側のナショナルな背景や知識などにより、碑から想起される記憶が大きく異なることが明らかにされた。また、茨城の場合、同一の地域であっても、互いに相容れない記憶のあり方が観察されるのだが、それが衝突するわけでもなく、並存し続けていた。

(2)「記憶の場」研究では、場・モノ 記憶の想起 場・モノの分析による記憶の社会的意味についての考察、という形式をおおむねたどる。しかし、この方法だと、忘却という位相を考究することができない。これに対して本研究では、ある形の想起が、他の形の忘却を伴うことを明らかにしている。例えば、茨城やマニラの例にみるように、碑や場が平和を願うという文脈を作りだしていたとしても、日本人の悲惨な死を想起することは日本人が行った他のアジアの人びとに対する加害が想起されないことが明らかになった。また、韓国の事例からは、南北の朝鮮民族の加害・被害の両義性を強調することは、双方の民間人に対する加害については忘却される傾向を生み、逆にそのような民間人虐殺の淵源を日本植民地主義に見出す、日本の加害性を強調する記憶が作り出されていったことが明らかにされた。

(3) 上述の研究の目的で示した三つの先行研究はおおむね東アジアに限られていた。本研究では、必ずしも十分な業績を上げることはできなかったが、日中韓の円環で再生産される記憶の問題を、フィリピンを論じることにより東南アジアからの観点を組み込み、再考することを試みた。

(4)「記憶の場」研究でも歴史家が分析の対象になっているが、本研究では特定の「記憶の活動家」が実社会の中では常に他の「記憶の活動家」と並存しており、ある記憶は他の記憶との対抗関係にあることを具体的に示した。茨城における日本人と在日朝鮮人、フィリピンにおける日比それぞれの観光客、韓中の遺骨外交における当初の韓国側意図と中国側意図がその事例として挙げられる。また、記憶は「英雄物語」にのみ有意義な関係にあるわけではなく、他の記憶とも往々にして対立・並存の関係にあることが明らかになった。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

岡田泰平「「記憶の政治」研究を振りかえる」ピエール・ノラ編『記憶の場』日本語版の受容を中心に、『歴史評論』(808号)2017年8月、刊行前頁数不明、査読無

佐々木啓「「記憶」の時代の茨城 戦争の表象をめぐる」『歴史評論』(808号)2017年8月、刊行前頁数不明、査読無

カール・イアン・チェン・チュア「想起を介した忘却 日比におけるアジア・太平洋戦争の碑と観光」『歴史評論』(808号)2017年8月、刊行前頁数不明、査読無

金賢信「国民和解と外交の間 朝鮮戦争をめぐる記憶」『歴史評論』(808号)2017年8月、刊行前頁数不明、査読無

本庄十喜「日本の過去・現在・未来 - 戦後補償の意味と行方」『北海道歴史教室』201・202号、北海道歴史教育者協議会、2017年1月号、2-15頁、査読無

佐々木啓「「戦後70年談話」と歴史修正主義」『日本の科学者』(通号583)2016年8月、398-403頁、査読無

本庄十喜「戦後補償問題の歴史的展開と加害者認識」『日本の科学者』(通号583)2016年8月、404-409頁、査読無

岡田泰平「環太平洋帝国アメリカにおける統治権力と移動の権利 フィリピン系住民のハワイ市民権認定を事例として」『アメリカ研究』(50号)2016年、1-19頁、査読無

岡田泰平「総論に代えて アメリカ合衆国の現代的性格についての一試論」『歴史評論』(780)、2015年、5-16頁、査読無

岡田泰平「(研究動向)植民地教育 東アジアとフィリピンを中心に」『歴史と地理 世界史の研究』(689)、2015年、39-42頁、査読無

岡田泰平「(書評)静岡県近代史研究会編『時代と格闘する人々』羽衣出版、2015」『静岡県近代史研究』(40)、2015年、96-99頁、査読無

佐々木啓「近現代史部会/伊藤淳史報告(二〇一四年度日本史研究会大会報告批判)」『日本史研究』(632)、2015年、41-44頁、査読無

本庄十喜「日本における靖国問題の現状とこれからの運動 A級戦犯合祀だけが問題ではない」『史流』(45)、2015年、43-49頁、査読無

本庄十喜「日本における「過去の克服」に向けて: その課題と展望」『歴史地理教育』(829)2015年1月、19-24頁、査読無

岡田泰平「戦時性暴力はどう裁かれたか
セブ・マクタン島コルドバの事例から」『ア
ジア太平洋研究』(39), 2015年, 129-147
頁、査読無

〔学会発表〕(計18件)

岡田泰平「フィリピン・セブにおける日本
軍性暴力 BC級裁判資料を中心に」日本オ
ーラル・ヒストリー学会, 一橋大学, 東京都
国立市, 2016-09-03 - 2016-09-04

岡田泰平「Manuel L. Quezon's
Trans-Pacific Itinerary: Mexican
Influences on the Social Policies of the
Philippine Commonwealth」ICOPHIL
(International Conference of Philippine
Studies), デュマゲッティ, フィリピン共
和国, 2016-07-06 - 2016-07-09

金賢信「Conflict of War Memories in South
Korea: From the Korean War to the Asia
Pacific War」Joint Workshop on the Asia
Pacific War--Global History Education and
Postwar Memories, ケソン市, フィリピン共
和国, 2016-03-05 - 2016-03-06

佐々木啓「Ibaraki in the Era of
"Memories"」Joint Workshop on the Asia
Pacific War--Global History Education and
Postwar Memories, ケソン市, フィリピン共
和国, 2016-03-05 - 2016-03-06

本庄十喜「War Memories in Hokkaido and
Movement to "Dig Up" People's History」
Joint Workshop on the Asia Pacific
War--Global History Education and Postwar
Memories, ケソン市, フィリピン共和国,
2016-03-05 - 2016-03-06

カール・イアン・チェン・チュア「Arguments
from the Outside: Memory of World War II
from Children's Literature in the
Philippines」Joint Workshop on the Asia
Pacific War--Global History Education and
Postwar Memories, ケソン市, フィリピン共
和国, 2016-03-05 - 2016-03-06

岡田泰平「The Visayas Kempeitai: Its
Crimes and Postwar Silence」Joint Workshop
on the Asia Pacific War--Global History
Education and Postwar Memories, ケソン市,
フィリピン共和国, 2016-03-05 -
2016-03-06

岡田泰平「Wartime Sexual Violence in
Cebu and its Traces」Occupation and
Liberation: An International Conference
on the Pacific War in the Philippines, マ
ニラ, フィリピン共和国, 2015-09-03 -
2015-09-05

カール・イアン・チェン・チュア「Komiks
and World War II」, UP Likas, University
of the Philippines, Diliman, ケソン市, フ
ィリピン共和国 2015-03-26

カール・イアン・チェン・チュア「Komiks」,
"The Battle of Manila" Symposium, Ayala
Museum, Makati, Metro Manila, フィリピン
共和国, 2015-02-21

カール・イアン・チェン・チュア
「Philippine Komiks and the Construction
of Children's Memory from the Immediate
Post-War to the Present」,
Multi-perspectives in East Asia Studies,
University of Asia and the Pacific, Manila,
フィリピン共和国, 2015-02-09

カール・イアン・チェン・チュア「Japanese
Cultural Influence」Pasale 3, Ateneo de
Naga University, Naga, フィリピン共和国,
2015-02-03

本庄十喜「日本の過去・現在・未来 戦
後補償の意味と行方」北海道歴史教育者協議
会冬の全道研究集会, 発表場所札幌エルプ
ラザ, 北海道札幌市, 2015-01-05

岡田泰平「戦時性暴力はどう裁かれたか
セブ・マクタン島コルドバの事例から」学
会等名「南京研」「沖縄研」合同研究会, 明
治大学グローバルフロント, 東京都千代田
区, 2014-12-13

本庄十喜「日本における靖国問題の現状と
これからの運動 A級戦犯合祀だけが問題
ではない」第13回「歴史認識と東アジアの
平和」フォーラム 北京会議, 中国人民大学,
中国北京, 2014-11-23

佐々木啓「アジア・太平洋戦争をどうとら
えるか」第35回茨城県歴史教育者協議会大
会, ひたち野リフレ, 茨城県牛久市,
2014-11-09

カール・イアン・チェン・チュア「マンガ
における戦争」マンガを通じての平和教育,
広島市西区民文化センター, 広島県広島市,
2014-11-08

カール・イアン・チェン・チュア「Learning
about World War II: Narratives from
Contemporary Children's Literature in the
Philippines, Center for the Study of Peace
and Reconciliation」, 一橋大学, 東京都国
立市, 2014-11-06

本庄十喜「地域史の掘り起しから戦後補償
運動へ 名古屋の事例から」北海道歴史研

究者協議会，発表場所かでの 2・7，北海道札幌市，2014-09-20

本庄十喜「日本国内における戦後補償運動の一考察」北海道教育大学史学会，発表場所北海道教育大学札幌校，北海道札幌市，2014-07-20

②①カール・イアン・チェン・チュア「Philippine Komiks and the Construction of Children's Memory」，Sophia Initiative for Education and Discovery，上智大学，東京都千代田区，2014-05-24

②②カール・イアン・チェン・チュア「日本の漫画における外国人の描写，1930年代～1940年代」漫画と戦争の記憶，北九州漫画ミュージアム，福岡県北九州市，2014-05-10

②③カール・イアン・チェン・チュア「Friend or Foe? Representations of the Japanese in the Philippines Print Media: 1940s to the Present」京都大学東南アジア研究センター研究会，京都大学東南アジア研究センター，京都府京都市，2014-04-24

〔図書〕(計 12 件)

岡田泰平「戦争ノ平和と生存 アジア太平洋戦争を中心に」歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題』績文堂，2017，287-303 頁

岡田泰平「アメリカ植民地期 作られた「恩恵」の物語」大野拓司，鈴木伸隆，日下渉『フィリピンを知るための 64 章』明石書店，2016，113-117 頁

本庄十喜「戦後日本における知識人の朝鮮観 朝鮮人 B C 級戦犯と朝鮮人被爆者問題から見るジャーナリズムの役割」杉並歴史を語り合う会，歴史科学協議会編『隣国の肖像 日朝相互認識の歴史』大月書店，2016，241-257 頁

佐々木啓「家永三郎『太平洋戦争(第二章)』」歴史学研究会『歴史学と，出会う：41 人の読書経験から』青木書店，2015，58-63 頁

吉田裕，一ノ瀬俊也，佐々木啓監修『証言記録市民たちの戦争 1 (銃後の動員)』大月書店，2015，385 頁

吉田裕，一ノ瀬俊也，佐々木啓監修『証言記録市民たちの戦争 2 (本土に及ぶ戦禍)』大月書店，2015，355 頁

吉田裕，一ノ瀬俊也，佐々木啓監修『証言記録市民たちの戦争 3 (帝国日本の崩壊)』大月書店，2015，333 頁

佐々木啓「民衆の徴用経験 / 徴用工の日記・記録を用いた分析」アジア民衆史研究会，歴史問題研究会『日韓民衆史研究の最前線 - 新しい民衆史を求めて』有志舎，2015，168-190 頁

Karl Ian Cheng Chua, "Representing the War in Manga," *Controversial History Education in Asian Contexts*, Routledge, 2014, pp. 123-139.

Karl Ian Cheng Chua, "Friend or Foe: Representations of Japan in the Print Media in the Philippines, 1940s to the Present," *Imagining Japan in Post-war East Asia: Identity Politics, Schooling and Popular Culture*, Routledge, 2014, pp. 85-105.

本庄十喜「関東大震災 90 周年記念集会の意義と今後に向けて」『関東大震災 記憶の継承 - 歴史・地域・運動から現在を問う - 』日本経済評論社，2014，259-273 頁

本庄十喜「Q14 東京裁判は戦勝国による不当な裁判である？」『すっきり！わかる歴史認識の争点 Q&A』大月書店，2014，79-84 頁

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 泰平 (OKADA Taihei)
静岡大学・情報学部・准教授
研究者番号：70585190

(2)研究分担者

本庄 十喜 (HONJO TOKI)
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：40584454

(3) 研究分担者

佐々木 啓 (SASAKI KEI)
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：50581807

(4)研究協力者

カール・イアン・チェン・チュア (Karl Ian
Cheng Chua)
アテネオ・デ・マニラ大学・歴史学部・講
師

(5)研究協力者

金 賢信 (Kim Hyun Shin)
中央大学・総合文化政策学部・非常勤講師